

情報教育論 電子化教材

第4回

コンテキストを超えたコミュニケーションの可能性

斎藤 俊則

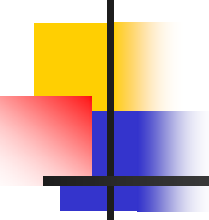
慶應義塾大学 環境情報学部

非常勤講師



今回の講義

- メディア・リテラシーが要請される背景にある情報社会化
- 情報社会の文化状況におけるメディア・リテラシーの課題
- 情報教育としてのメディア・リテラシー（ふたたび）



メディア・リテラシーが要請される 背景にある情報社会化



情報社会とは

- “情報”のやり取りを中心に成立する社会
 - モノの性質がある目的に従って記述され、それ自体が交換の対象となる
- 近代社会はそもそも初めから情報社会である(ギデンズ)
 - 計画に基づく人の動員、税の徴収etc.
- ITを中核とする情報メディア・情報ネットワークが普及することにより、この傾向が大幅に加速される

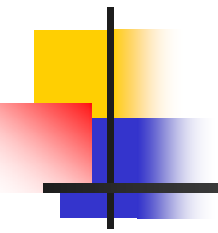


情報社会化の進展

- 情報受信、情報発信に対する技術面・心理面でのコストが以前と比べ相対的に低下する
- 個人が多様なコミュニケーションチャンネルを持つことが可能になる
 - 個人のための各種情報端末、情報サービスの普及
- 各種の社会制度の側も情報技術を活用することにより、個人が情報メディアを介したコミュニケーションへ積極的に動員される
 - 企業によるネットワークベースの経済活動、行政による情報化推進政策

情報社会化が文化に及ぼす影響

- 情報源の多様化によるマスメディアの相対化
 - いわゆる“マス”が成立しづらくなる
 - 人々の関心事の多様化が進む
- 文化、それを支える価値観の断片化
 - 社会全体を包括する文化や価値観、規範が成立しづらくなる
 - 「大きな物語」(リオタール)の衰退
 - いわゆる“サブ・カルチャー”化が進行する



情報社会の文化状況におけるメディア・リテラシーの課題



情報社会の文化状況におけるメディア・リテラシーの課題

- 「ロー・コンテクスト (low context・コンテクストの共有度が低い状態) な状況を前提としたコミュニケーションに対する準備」が求められる
 - 文化の断片化の進行
 - その一方で、より広範な相手とのコミュニケーションが求められる
 - かつての日本は”high context”(エドワード.T.ホール)な社会
 - 特に、公教育の教育のあり方にはその傾向が顕著である(宮台)



たとえば前回の演習では

- “例の雑誌広告”の読み取りに関連して、みなさんのアイデンティティの規定の仕方を質問
- たとば「SFCの学生」として規定する場合
 - 何(誰)に対する特殊性を訴えるのか？
- さらにその中に、他の様々な規定が関連する
 - 所属研究会、社会人
 - 経験の有無、性別、出身etc.
 - コンピューターに対する態度、広告のどの部分に注目するか、という点の違い



「SFCの学生であること」の意味

- SFCの内部で良い・正しいとされることが、その他の場所で良い・正しいとは限らない
 - 「SFC特有の文化」と思われるもの...振り返ってみましょう
- 場合によっては、相手の側が「SFCの学生」であることを過大に捉えることもある
 - どちらが一方向的に正しい訳でも間違っている訳でもない
- このような状況で、相互に幸福な関係を築くためには何が必要か？
 - メディア・リテラシーの教育上の課題
 - メディア・リテラシーを学ぶ必然性



演習1

- 自分の普段の学生生活を振り返り、「SFC特有の行動様式・規範・文化」だと思われるものを記述せよ
- 日常のコミュニケーションにおいて、自分がSFCの学生であるがゆえに相手との誤解やトラブルが生じたと思われる例はあるか。それはどのような相手とどのようなメディアを用いたコミュニケーションの中で生じたか



コミュニケーションの齟齬と価値観

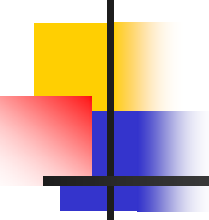
- 相手の価値観(=解釈コード)と自分の価値観とのギャップがコミュニケーションの齟齬を生む
 - low contextな文化状況ではこの状態が常態化する
- このギャップを乗り越えるためには、互いのギャップをもたらしものを見いだし、理解する努力が必要
- 「解釈コード」、「社会的コンテクスト」といったキーワードは、“ギャップをもたらしもの”を把握する際の手がかりとなる

価値観のギャップを理解する着眼点

- 相手/自分の価値観を、社会的に形成される解釈コードとしてとして見直す
- それを必然化する文化的・社会的コンテクスト(=属する国、地方、グループのメンバーによって共有される行動規範、価値観、歴史観、共通の関心事・出来事、その他の状況)を相対化する
- 文化的・社会的コンテクストを支え、実体化する具体的な制度(政治、経済、教育、宗教、その他)を考える

社会的コンテクストの相対化のための実践

- 自己の価値観、それを取り巻く諸々のコンテクストを意識化する
 - メディアテクストの「読み」には、必ず自己が投影される
 - 意識化するためには記述(=外化、対象化)が有効
- 「自分でない(自分が所属しない)もの」が何であることを意識化する
 - 自己の規定の見直しと同時に
- 自分がどのようなカテゴリーを導入して社会を捉えているかを理解すると同時に、異なる捉え方の可能性を常に意識する態度を身に付ける



情報教育としてのメディア・リテラシー (ふたたび)

情報教育としてのメディア・リテラシー

- メディア・リテラシーの実践における2つのメディアの位置付け
 - 自分の価値観を形作るものとしてのメディア
 - 相手との関係を築くための道具としてのメディア
- 今回の一連の講義・演習は主に前者について
- 実際には、相互が支え合う関係にある
- 後者は今後、一般的な「情報リテラシー」の教育と連携しながらおこなわれる



「二つのメディア」の関係

- 「価値観を形作るものとしてのメディア」のメカニズムを分析することは、メッセージを伝えるための原則を学ぶことである
 - 記号学におけるシンボルと差異の原則、解釈コード、コンテクストなどのシステム
- 「相手との関係を築く道具としてのメディア」を学ぶためには、メッセージの送り手の立場に立つ必要もある
 - いかにコンテクストを超えられるか、が主題となる
- 送り手の立場に立つことで、同時に「クリティカルな読み手」としての視点が鍛えられる

情報教育におけるメディア・リテラシーの実践例

- インターネットを題材とするメディア・リテラシー
 - Webページの評価と制作
 - 新規入学者から見た大学のWebサイトの比較(湘南藤沢高校・・・制作まではできなかった)
 - メーリングリストを利用した交流学习
 - 「連歌プロジェクト」(同上)
 - 匿名掲示板を題材とするメディア・リテラシー
 - 情報の信頼性の判断
 - 活用方法の模索



情報教育の観点からの論点

- 情報の信頼性をいかに判断するか
 - マスメディアと違い、インターネットにおいては誰もが気軽に情報発信者となる
 - 「情報の信頼性」は常に問題となる
- コンテキストの相対性を認める以上、「情報の正しさ」や「情報の価値」は相対化される
 - 「情報の真偽」という観点を導入すると、ナイーブな議論になりがち
- 情報倫理の問題との関連
 - 合意形成に向けての議論には多くの人に参加すべき
 - 情報倫理を理解・形成する土台としてのメディア・リテラシーの観点



演習2

- 4回の講義を振り返り、以下の点を記述せよ
 - 1.この講義で学んだこと
 - 2.この講義で感じたこと
 - 3.意見・言いたいこと